

国際シンポジウム

未来へつなぐ世界遺産のあり方—東アジアの場合— How the World Heritage Should Be Toward the Future : In the Cases of the East Asia

日程：2011年6月18日（土）

場所：国士舘大学世田谷キャンパス 34号館 B302教室

講演者：姜 大一（国立韓国伝統文化大学校 韓国）「韓国における保存と活用」
杜 曉帆（ユネスコ北京事務所 中国）「中国世界遺産の現状と課題」
沢田 正昭（国士舘大学21世紀アジア学部）「日本における世界遺産と観光」
コーディネーター：西浦 忠輝（国士舘大学イラク古代文化研究所）

姜 大一 「韓国における保存と活用」

皆さんご存知のように、世界遺産はユネスコが1972年に、人類全体のために保護しなければならない普遍的な価値があると認めた文化遺産です。タンザニアのセレンゲッティ、エジプトのピラミッド、オーストラリアのクイーンズランドとかブラジルのサルバドール、そういうようなものが入っています。世界遺産はその特性で、文化遺産、自然遺産、複合遺産の三つに分かれています。韓国には、文化遺産が9つ、自然遺産が1つあります。

いちばん最近登録されたのは昨年の、朝鮮時代の民族村として指定した河回と良洞というところで、嶺南地方という韓国の東海岸の南側にある地域にあります。最初に指定されたのは、仏国寺。そして済州島は自然遺産として指定されています。時代が古いのは青銅時代のドルメン遺跡で、新しいのは朝鮮時代の昌徳宮、宗廟、華城です。人類無形文化遺産は11件、踊りとか儀式、舞踊などいろいろですね。木造の建物を作る技術や鷹を使って動物をとる鷹狩りも指定されています。記録遺産は9件ありまして、韓国の文字であるハングルが入っている「訓民正音」から、今はフランスにある「直指心體要節」という本、そして今年の5月に記載が決まった「5・18光州民主化運動関連記録物」ですね。1980年の光州における民主化運動の資料などがあります。

仏国寺・石窟庵からお話しましょう。登録年度は1995年、作られた年は774年で日本で言えば奈良時代の末、平安のちょっと前くらいです。中国でも敦煌とか雲崗といった石窟のお寺がありますが、それは自然にできています。韓国のものは360という数の花崗岩を建築的に計算して積み上げた人工寺院です。これは文化財の保存の歴史の中でも重要な存在で、朝鮮時代の17世紀から資料に現れていましたが、一般の人に知られるようになったのは、1907年に日本人の郵便配達が発見したからです。1910年ごろには表面にコケなどがついていたので、1912年から13年から3年くらいかけて大きな工事が行われました。入り口などを少し変えたため、オリジナルなものが変わったという批判もありますが、保存的なことから考え、コンクリートで二重のドームを作って、湿度や結露などの問題を

調節しようしたんです。でも、これがなかなかうまくいかなかった。それ以降も、いろいろな装置を入れて問題を解決していこうとしたのですが、やはりなかなかうまくいかず、1960年代くらいになって積極的な補修工事が始まりました。空調設備を入れ、覆い屋をつくり、中にはガラスの壁をつくりました。だから今は中に入って現物を見ることは難しいです。そうすると、入場料を払う側から文句が出てきますよね。せっかくお金を払ったのに、中まで入ることができない。しかし、皆が中まで入ってきたら、何年もたたないうちに壊れてしまうでしょう。今はある程度安定して保護されています。

次に仏国寺です。石窟庵と同じ1995年に世界遺産として登録されました。ここも石窟庵と同じ金大城という人が中心になって作られています。1960年代後半から70年はじめまで大きな補修工事が行われ、中の大きな二つの塔は国宝に指定されています。また韓国の国立文化財研究所が中心となって、釈迦塔と多宝塔のふたつの塔の補修を行っています。世界文化遺産に指定された後は何もしなくてもいいのではなくて、定期的にモニタリングという調査をしなければなりません。科学的な診断や保存などをしっかりとしていかなければ世界遺産を解除されてしまうからです。それに国の重要なものでもありますから、力を入れて保存などの整備をやっているところです。一昨年、一応の工事が終わったのですが、今年になってまた全面的な工事が決まりました。この慶州石塔補修整備事業では、精密機械を使った勾配などの調査とか、サンプルが取れるところはサンプルをとって、石の材質とか風化劣化とかそういう部分を調べ、記録をとります。

次は海印寺というところです。高麗時代の1251年、日本では鎌倉時代に当たる時期ですが、北のモンゴルからの侵入に対抗し、国を守るための仏教の経典をのべ何万人という一般の庶民たちの力を集めて作られたものなのですが、建物自体がユネスコの世界文化遺産に、中にある8万という数の大蔵経板は世界記録遺産として登録されています。そして両方とも国宝として指定されています。この建物自体が危ない時期もありました。韓国は北と南に分かれています。朝鮮戦争の時期の1950年代に、北朝鮮関係のゲリラが中に入ったという情報が入り、アメリカ軍などが爆撃しようとしたことがありました。けれどもギム・ヨンファンという軍人が止めたんです。我々の文化財に爆撃するなんて、そんな馬鹿なことはするな、と。そのおかげでこの建物は残ることができました。

この建物は科学的に作られています。上と下と窓の大きさが違うんですが、これは風の通しをよくするためです。山の中間の丘の所にあるため、風の方が違う。下から行く風と上から来る風の影響をよく考えて作られた建物です。それから、お釈迦さまの誕生日、旧暦で4月8日の灌仏会を花祭りと呼びますが、韓国ではその日に法要をします。ここの遺跡では信徒たちが経板を持ってお寺の周りを回るんですね。今は紙袋に似たようなものを入れて儀式を執り行っています。今年は組織委員会ができて、10月に盛大にやるという話です。もし機会がありましたら、皆さん行ってみてください。

次は宗廟、これは京都の三十三間堂より長い建物です。ひとつ一つの柱の間に朝鮮時代の国王の位牌があり、儀式が行われていました。宗廟の建物そのものは世界文化遺産、そこで行われる儀式と演奏される音楽も、世界無形文化遺産として登録されています。できたのは1395年で、日本の安東忠雄のような建築関係の先生がこの建物を見て、非常に立派だといってくださっています。四月ははじめに行われる祭礼やその際の音楽などのいろんな儀式もちょうど10年前にユネスコに登録されています。

次に、ソウル市内にある昌徳宮です。これは15世紀のはじめにできたもので、朝鮮時代に国王が公務員の試験を行っていた場所です。国宝にも指定されている東闕圖というその時代の宮廷の地図に、景福宮、昌徳宮、昌慶宮、徳壽宮、慶熙宮が載っていますが、唯一昌徳宮が世界文化遺産として登録されています。ここでは催し物もたくさんありまして、本をここで読んだり、月見の行事をしたりします。最近はパレス・ステイといって、宮廷のなかで生活する施設もあるのですが、これは一般の人でなく特別に選ばれた人が参加できます。なかなか評判がよくて、一般の人にも、という話が進んでいると聞きました。

次は、華城です。これは水原というところにある18世紀に作られた城です。城としての外装や内装ばかりでなく設計図などの記録が残っていることです。日本でも放映されている韓国ドラマの「イ・サン」の登場人物がここを積極的につくりました。お城には様々な儀式をしたり、服を借りて記念撮影ができたり、いろいろな伝統文化を体験できるような施設がたくさんあります。

ドルメンもあります。ドルメンはストーンヘンジとかイースター島モアイ像といった青銅器時代の巨石文化で、韓国には世界の40%ものドルメンがあるのです。その三分の二は南韓国にあります。それぞれ屋外で保存しているところもあるし、近くに博物館を作って、見せるようにしているところもあります。それから、青銅器時代が体験できるような施設を作っているところもあります。

済州島は、2002年に漢拏山が生物圏保存地域としてユネスコに保存され、2007年には世界自然遺産、2010年には世界七大自然景観として挑戦しています。こちらには天然記念物が非常に多いんです。世界自然遺産に登録してから観光客が多くなりまして、ゴミの問題、自動車排気汚染の問題などいろいろな問題が発生しています。とはいえ、世界遺産の登録は地域としては観光収入が上がるので、それはそれで喜ばしいことでもあります。

河回と良洞は民族村です。河回村は安東にあります。こちらでは仮面も有名で、また儒教の本拠地でもあることから、しっかりした礼儀作法も伝えられています。建物や生活文化もありますが、ここが世界遺産に指定されてから観光客は4倍にも伸びました。7月から8月の1ヶ月間で4倍。すごい変化です。今後どう対応していくかを考える運動もおこっています。

世界文化遺産管理の課題を最後にお話しましょう。韓国でもユネスコが持続可能な遺産保護として推奨する7つのガイドラインに沿ってやっているのですが、今後は、どんなに文化遺産の観光が社会的に求められている現象であっても、保存をしっかり考え実施していかなければならないと考えています。

杜 曉帆「中国世界遺産の現状と課題」

本日は、中国における世界遺産の現状をテーマにお話いたします。

中国の世界遺産と聞くと、皆さんが思い出すのは、万里の長城や敦煌ではないでしょうか。中国の世界遺産関連の歴史を振り返ってみますと、中国国内では世界遺産に対し、1950年代くらいまではあまり学術的な関心はありませんでした。もっと言えば、私は1991年に日本に来たのですが、それまで中国で博物館に勤めていました。それなのに、世界遺産という言葉は聞いたことがなかったんです。

世界遺産条約ができたのは1972年ですが、1985年まで、中国の一般社会はもちろん、学術的にも

世界遺産を知らなかったんです。1984年に歴史・地理学の学者がアメリカの国際会議に行き、初めて世界遺産の情報を得ました。そして、文化財の先生方と協議し、世界遺産条約に加入するように手配したのです。それから全国人民代表常務委員会での決定をもって、1985年に締約国になりました。1986年には、世界遺産委員会に28件の暫定リストを提出、1987年に6つの世界遺産が登録されました。先ほど申し上げた万里の長城、北京の故宮、敦煌、兵馬俑、北京原人、泰山、これが中国の第一番目の登録です。ですが、これらに関して資料が何も残っていないのです。当時は書類一枚を提出しただけで、今の状況とはぜんぜん違っていたんですね。

中国は2010年7月までに40件の世界遺産が登録されています。それ以外にも、毎年暫定リストに加えられています。申し込んでいる地方が多くて、8月くらいにもう一度政府が暫定リストを調整するらしいのですが、今のところ、文化遺産35件、自然遺産14件、複合遺産10件が暫定リストに載っています。

まず問題点についてお話させていただきます。世界遺産という言葉が中国に入ってきたことで、文化財に大きな影響を与えました。特に中国で元々考えられていなかった理念の保存、それから例えば、文化的景観、文化の道、産業遺産、二十世紀遺産、中国の特別な遺産の赤色遺産。1992年に文化的景観が文化遺産の新しい概念としてユネスコの世界遺産のなかに創立されましたが、早くも中国では1996年に文化的景観がひとつ登録されています。廬山です。しかし、中国の専門家にしても、政府関係者にしても、廬山の管理者にしても、文化的景観というのは何なのか、分かる人はその当時いなかった。1996年までに中国では複合遺産と自然遺産にいくつかの地域が登録されていますが、それ以上ひとつの地域で生物多様性が世界遺産の基準に値する場所はない、ということになっていました。そうしましたらアメリカのある学者が、文化的景観という新しい言葉を持ち出してきた。それだったら世界遺産に登録されるかもしれないと頑張ったんです。廬山が世界遺産になってから15年たちましたが、中国人の意識の中では、文化的景観というのは他の文化遺産や複合遺産より低いレベルと考えられているため、その管理者たちは今でも不満に思っています。

文化の道に関しては、シルクロード全体を文化遺産として登録しようと、中国をはじめ、中央アジアの5つの国と、最近では日本も韓国も入って努力しているのですが、これも今まででは考えられないことでした。このシルクロードというものをどのように保存するか、が難しい。国によって文化財の保存法は違います。世界遺産といってもまずその国のものですので、その国の文化財の法律を守らないといけない。そうすると、申請時の文章をどのように書こうか。基準は何にどこに拠ろうか。大陸のシルクロードだけではなく、草原の、そして海のシルクロードも登録しようとしているところですが、こんな大きな話になると、同じ基準や同じ方法で保存できるか。それは非常に大きな問題です。

産業遺産は今ブームになっています。例えば、北京の空港から市内に行くところに工場群があります。これは70年代、80年代に利用されていたところで、今は他の様々なことに使われています。ただ、私自身が産業遺産に関して疑問があるのは、世界遺産としての価値がどこにあるか、何を見せるか、というところです。外の建物は活かしていますが、中は他のいろいろなこと、たとえば商業といった今現在のことが行われている。他の文化遺産と比べて、価値基準が違うのではないかと感じています。

井岡山をご存知でしょうか。景観も生物多様性も、中国の華南地方のなかでも豊富です。また、この地域には、中国の中心の地域から移ってきた客家という人たちが現地の人たちと一緒に築いてきた文化があります。しかしここが注目されているのは、1928年から1930年の2年間で、中国の近代の歴史において大きい事件があったからです。毛沢東が湖南省から1000人とともにこの山に入った。ここで国民政府と闘って、最終的に有名な長征を行い、そして中国の歴史が変わった。ですから、今の政府はこの山を大事にして、世界遺産に申請しようと書類を作っています。さてこのいわゆる赤色の遺産をどうするか。この部分は中国の政府にとっても研究者にとっても重要ですが、扱いは非常に難しい。世界遺産としての価値があるか。これが認められたら世界遺産の基準も変わらないといけなくもしい。でも無視もできない。こういったことも考えないといけません。

次に、保存・修理に関わることですが、例えば2007年に登録された高句麗と古墳群があります。1930年代の日中戦争時、たくさんの北朝鮮の方が、朝鮮半島から逃げてこの遺跡の周辺に家を作って住み始めた。けれども世界遺産に申請するために整備が必要になり、彼らはどこかに行かされてしまいました。高句麗時代の歴史も大事ですけども、世界遺産に申請するためにその後に繋がる歴史を全部つぶしてしまうということは文化遺産の保存の考え方としてどうなのでしょう。

また、中国になかったやり方の導入や修復にも疑問があります。故宮などの大修理はいろんな国から批判されています。故宮の西のほうは入場禁止が、ここは昔一夫多妻制の後宮があったところです。そのような建物を、お金をかけて彩色しなおすかどうか。中国は彩色しようとはしますが、西洋的な考え方では現状維持が一番大事となる。

修理上の問題はほかにもあります。たとえば、壁紙につける糊。昔の技術なら100年持ちましたが、今の中国の技術では5年持たない。全部剥落してしまう。今回の修理では、新時代の使えるものを使って材料を保存していく考えですが、たとえば少し古く見せるにしても、どのくらい古く見せるのか。保存にしても、材料のために保存するか、あるいは形のために保存するか。最終的に我々が残ってほしい故宮はどういうものか。それが解決できてなくて、今はまだ表面的な問題を西洋の先生方と議論しているところです。

また、中国の世界遺産にはまだ人が住んでいる文化遺産があって、そういうものをどうするかが議論されています。平遥という街は、五台山がある山西省にあります。中国で北のほうに唯一残っている明清時代の街です。ここは1997年に世界遺産になりましたが、1年に160万人以上の観光客が来ています。けれども、ひとつの街ですので、登録当時は5万人くらい、今も3万5千人くらいが暮らしています。街に入るには日本円で2000円くらいと結構高いチケットがいります。そうすると、観光客はお金を払ったのだから私は客だ、と偉そうな態度をとります。街に住んでいる人たちを尊敬する気持ちも何もない。中で生活している人たちは20年30年前の暮らしと変わっていないんです。これをどう解決していくか。

福建省には2008年に登録されたタウンハウスみたいなものがあります。世界遺産ですが、住んでいる人にとっては単なる家です。生活しているのですから、エアコンなどつけて、快適な暮らしをしようとしていた。けれども、登録した後はエアコンは取り外さなくてはならない。観光客が糞を踏んだら気持ち悪いから鶏もダメ。こういう問題は、その文化遺産の持ち主は誰か、ということに関係します。このことを中国は真剣に考えないといけません。

理論ですが、地方政府の人は世界遺産と地域振興という言葉をよく使います。高いお金と時間をかけて世界遺産を登録するのはなぜか。地域振興のためですよ。

故宮や万里の長城みたいところは、お客さんの方が大変です。5月の中国のゴールデンウィークのときには、一日12万人故宮の中に入るんです。故宮は殆ど人間だらけで、人の頭しか見えないような状態です。そういうところもあれば、1987年に登録された北京原人のところのように、紹介ドラマを作ったりしながらも、お客さんがこないところもあります。一番多い年でも年間15万。雲南省には三江併流という自然遺産は、景色はとてもきれいですが、お客さんは入れない。高いところからしか見えず、飛行機で行くしかないのです。世界遺産に登録された後、雲南省がダムを作りたいと考えた。けれども世界遺産ですからダムは作れない。観光客がくることができないから経済的な収入はないし、ダムも作れない、という状況ですので、雲南省は世界遺産に対してすごく不満があります。

最後になりますが、中国は、文化は外の人に売るものではない、と考えています。今の中国の文化遺産、とくに人が住んでいるところは、自分を売っているような感じがしている。尊敬とかお互いの理解とか何もなく、ただ演じるだけ。観光は確かに遺産を長く持たせる重要な要素です。けれども、観光関係の人たちは今、遺産を商品として考えている。それはいけないと思います。どんなものでもなくなるということは、人間の力ではどうしようもない。最終的にはなくなるんです。でも、その過程の中で我々が何ができるか。それを考えないといけないと思います。

沢田 正昭「日本における世界遺産と観光」

まず毛越寺というお寺を紹介します。3月11日に地震があったけれども無事だった、という報告がありました。浄土思想という言葉はヨーロッパの人には聞きなれないかもしれませんが、その趣をよく残しているということです。

中尊寺というお寺は皆さんお聞きになったことがあるかと思います。その金色堂は、今は保存のためにコンクリートの壁の中に入れて、地震あるいは火災などの災難から守っている。空調設備も整っているの、温室管理もきちんとできる。これができたのは1970年ですけれども、当時としてはかなり最新の設備を整えていて、3・11の地震も無事に乗り越えることができました。これが来週あたり、世界遺産になるだろうという案件です。あわせて東京都の小笠原諸島も自然遺産になるだろう、ということになっています。

今、お二人の先生から中国と韓国の世界遺産についてお話いただきましたが、まずは世界遺産という言葉について、少しお話ししなければならないと思います。日本は1992年に条約提携をしました。1972年にユネスコ協会で話されてから20年、日本は何をしていたのか、という感じはありますが。現在世界には911件の世界遺産があります。今回先生方にお話いただいたもののほかに、危機遺産というものも現在34件ありまして、これについても研究する必要があるだろうと思います。

日本には現在、14件の世界遺産があります。文化遺産は11件。一番最初は法隆寺です。本日お話ししようと思っているのは、白川郷、これは岡山の合掌造りの集落です。それと一番新しく登録され

た石見銀山。日本が暫定リストに載せているものはいくつかありますが、今回そのなかで、2001年に暫定リストに載せられた平泉、2007年にリストに載せられた小笠原、このふたつが世界遺産になるだろう、ということになっております。

さて、文化遺産、世界遺産といろいろ申し上げていますが、私はこの文化遺産保存活用の体系について、三つくらいをテーマとして掲げることができると思っています。そのひとつは「地域」でして、これは、地域コミュニケーションといいますか、地域の連携といいますか、そういうキーワードで括れるかな、と思っています。つまり文化遺産・世界遺産というものは、それが所在している地域の個性を学ぶ場になるはずだ、ということです。難しいことではないんです。市民の憩いの場、交流の場、そんな捉え方です。地域とのコミュニケーションという考えですね。

もうひとつは「教育」でしょうか。歴史を学ぶ場。未来に向けて歴史を学んで、さらにこれからどうあるべきかを考える。文化遺産・世界遺産は、そういう場になっていいのではないかな。それから、人間、というか、宇宙、というレベルで考えれば、自然と人間の関わりというものを考えるきっかけを与えてくれる。そういう答えでいいのではないかな。もちろん、体験学習や生涯学習、そういう教育の場としても機能しています。

そして、今申し上げた二つにあわせまして、自分たちの文化遺産世界遺産、ここにこんなものがあるのだ、という「誇り」を持ってもらえるようなふうに仕向けていく。自分たちの文化遺産を誇りに思えるように持っていく。それが必要ではないかな。そうするとおのずと、保存していこう、草がぼうぼうになればきちんと抜いて世話をしよう。そういう意識がでてくるのではないかな。結果として、観光資源の保存に繋がっていくのだろう、というので、これが今日のひとつのテーマになります。

世界遺産文化遺産というものを観光資源として活用したい。お客を呼ぶことによって、地域が活性化していく。経済が振興していく。町おこし、という言葉にもつながりますけれども、こういうことで観光、というものがあります。今、三つの要件をあげましたが、それを考えていくと観光に繋がっていくのだらうと思いますし、そのためにいろんな遺跡が整理されていくのだらうと思います。保存・活用していくためには遺跡の保存整備をどうするか。実際の遺跡の住居跡、遺構を見せしていく、保存活用していくということになりますと、保存処理という仕事になりまして、より長生きさせるためにいろんな技術や手立てを使う、ということになります。発掘、考古学的な研究、建築学的な研究に基づいて、できるだけ正確に工面をしていく。そういうことで文化遺産・世界遺産というものを観光資源として活用していく、市民に分りやすく理解していただく。そういうことに繋がっていくのではと思います。

遺跡をひとさまに見ていただく、という考えが出てきたのは、そんなに古くない、ここ30年50年の世界であります。本当はこれが最古ではないのですが、奈良県の、日本で最古の都ができた平城宮。この地域を国で買い上げて、国の機関で年中発掘調査をはじめた。その成果などを踏まえて、活用という段階に入ったということです。いろんな役所が後押しして、そういうものをどう見せていくか。そういった保存整理を大規模にやるのは、これが日本で一番最初でして、歴史としては新しいといえるかと思います。今申し上げた平城宮跡というのは、中国の西安にある同時代の大明宮をモデルにしてつくられた、といわれておりまして、日本の最初の都のお手本になっている。その

大明宮も後に、どう整備をして、どう保存活用を図っていくか、ということが議論されまして、建物の位置や基盤というものを提示しているそうです。

平城京のほうに話を戻しますと、活用を考えていく上で復元というものがありますが、ここでは八世紀当時の庭石、奈良時代のものをそのまま見せているわけですが、これは土中に埋もれていたものを掘り出しているのです。そのまま放っておくと、劣化してなくなってしまう。だからどう残していくかを考えなければならないのです。平城宮をどうするか、ということで、あるイベント屋さんが奈良市のほうに提言をしたのは、巨大な覆い屋をかけて、それで復元した建物を見せたらどうか、というものでした。そういうことも実際あっていいのではないかと思います。文化的景観という点からみると問題が生じるのですが、巨大な覆い屋をかける。気が付かないほど巨大な覆い屋を。そうすると、お客さんには昼間だけではなくて、夜もきていただく、という話になります。よく博物館に行くと模型があって、ボタンがあって、それを押すと小さい電球がついて、これは何ですよ、という説明が出てくる装置がありますよね。これを実地でやってみようよ、ということで、実際に薬師寺のボタンを押すと、薬師寺のお堂がライトアップされる。これが朱雀大路、ということで、それが光る。それを巨大な覆い屋の上から見ると。これによって客を誘致する。まあ、ひとつの戦略ですね。現実には、いろんな法律がありますのでありえない話なのですが、将来的にはそんなこともあるかもしれない、ということでご紹介しました。

世界遺産の昼と夜を体験する、ということだと、ハンガリーのブダペストに小高い丘がありまして、夜そこに登りますと、世界遺産がたくさんならぶ夜景を写真にとれるような位置をセットしてくれているところがあります。お客としてはどうしても夜もそこにいないといけない、そして写真をとって帰らないとダメだ、というポイントを作っているのですね。中国の杭州にも、日中の風景ではここに遺跡があるのか、というくらいなのですが、夜になるととたんにライトがつきまして、お客さんがまあたくさんきてくれるところがあります。このように、夜の見学者を置くことでまた違ったアングルからの観光も活用のひとつの手立てとしてありえるのではないのでしょうか。

日本の遺跡では、例えば地域振興ということではいろんなイベントが催されます。こういう建物を復元していくときには、むやみに復元するわけではなく、発掘調査に基づいて考古学者や建築学者と検討したうえで行うのはありますが、なかなかそうもいかない場合もあります。青森県のほうにある縄文遺跡なのですが、柱の穴の跡から集落の見張り台を考え出したのですね。地元は地元で観光ということになりますとどうしても頑張る。漆塗りにしたい、とか、吉野の遺跡よりも高くしたい、とか。そんな話が出てくるのですが、そういった問題があちこちで現実にある、ということはいえるのではないかと思います。これも文化遺産、世界遺産のあり方として考えていかなければならないことだろうな、ということをお伝えしておきます。

これは文化庁あたりに主張したいことですが、遺跡を整備しましょう、と予算をつけてくれるのはいいのですが、できてしまうと、あとは勝手にしなさい、という感じになってしまう。客がたくさん入ってきて入場料を取っていると、収入があるからと予算が削られたりする。遺跡のリニューアル、という言葉が正しいかどうか分かりませんが、こういう手立ても考えていかないと回っていかないだろうということですね。

ひとつ例をご紹介しますと、白川郷の集落は合掌造りといって、合掌のかたちで屋根が似ているということから合掌造りという名前になったのですが、冬場だと景色のいい冬の風景と申しますか、

非常にきれいで、世界遺産として日本のなかでもかなり有名なところですが、いろいろなイベントも行われているところですが、こちらですと、10年かけて70万人くらいから150万人くらいに観光客が伸びた。

もうひとつの例は2007年の登録の石見銀山。鉱山の跡で、お寺があったり、商家があったり、橋があったり。こういうものがワンセットで残っている。白川郷の観光客は10年という、それなりの年月をかけて伸びたものです。だからこそ対応しきれたのですが、石見銀山のほうは、2007年6月に世界遺産に登録されて、その年のうちに観光客数が伸びた。年単位でまとめてみますと、2007年には30万人くらいだったのですが、2008年には70万人。1年で倍になった。急激な変化ですので大変です。お客を迎え入れる体制が整わない。そういう問題がありました。

世界遺産に関心を持っている国というのは、ほとんどの国がそうでしょうけれども、世界遺産に登録されることによって知名度が上がるだろう、観光客が増えるだろうと目論んでいるわけです。そういう部分までは話としてはいいですけども、そこから先、遺跡や建物に悪い影響が及ぶのではないだろうか、その場合は入場制限をしなければならない、そんなことをすると観光客が来なくなる、それはそれで問題だ、そういう風に話が進んでいくわけです。そこで今、たとえば観光客が増えても両立するような、持続可能な計画を考えなさい、というようなことはしてくれるのですが、もうすこし具体的なことになりますと鈍ってしまう。観光客の上限をつくって、遺産を保護していくか。それには、やはり民間企業を取り込んで、バランスを両立させていくようなことをしなければならないでしょう。そして、その遺跡が所在する地域で、もう少し観光業界と組んでやらなくてはいけない部分があるのではないだろうか。そういった根本的な要素がたくさんある。それらをいかに総合的にバランスよく解決の方向に持っていくか、そのあたりが重要ではないかと思っています。

世界遺産はあちこちにあるのですが、海外で申し訳ありませんが、アンコール遺跡があるカンボジアは現在120万人くらいの観光客が押し寄せています。危機遺産を脱した後の今は平和なアンコール遺跡なのですが、この120万という数字はどうなのか。あるいは、敦煌ですと年間20万の観光客がいますが、敦煌市のほうは、これからも観光を盛り上げていこうということで、どんどんホテルなんかも建てています。われわれのような保存屋からみますと、たくさんの人たちが一気に何十人も洞窟の中に入ると、温度湿度は高くなるといったような気になるところがたくさんでくる。仏像が損なわれる、壁画が損なわれる、ということになりますと、観光資源がなくなるわけですから市としても困るんじゃないか。20万人が限界じゃないの、といいたいところなんですけれども。

世界遺産を保存しつついかに活用していくか、を考えたいと思います。観光計画というものを考えていく上で、やはり観光業界との接点、というのは重要です。それから、地域のひとたちが誇りに思えることもポイントだと思います。そして、遺産を活用して、その地域独自の、地域に根ざしたビジネスのようなものが生まれてきてもいいのではないのでしょうか。そのためには、地域の人たちが積極的にそこに参加しなければならない。これもまた仕向けていかなければならないことです。経済的な支援ということでは、国や地域に頼るだけではなく、観光業界との接点、もちつもたれつの関係の中でどうやってくか。それも重要な要素です。

中国西安のモデルになったであろう唐代の遺跡、そして飛鳥の高松塚古墳。これらが少し劣化してきました。この理由には、地球温暖化の問題を無視できない。壁画のある石室の温度も上昇してきた。このことがいろんなことを生み出している、ということなんです。劣悪化していく地球環境。これと仲良くしていくための技術開発というものが求められるのではないか。私自身も年をとってきまして、いろんな病気を抱えてきましたが、この病気と一緒に長生きする手立ては何だろう。そういうことも考えていかないといけない、ということでございます。

ご清聴ありがとうございました。